

# 国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

資料化された、Tの身に起こった出来事。  
その資料を使い行った学年全体人権学習。  
そこでTは発言します。

「3人の発言を聞いて、Yさんは差別はなくなると言っただけ、その3人の  
つながりっていうのが、部落差別がなくなっていく形そのものだと思うんです。」

差別はなくなる なくなる

差別電話がかかってくるのが怖い 怖い気持ちが分からない

散々子どもたちが議論を繰り返すなかで出てきたTの言葉でした。

Tはこのあとも、母の思いや、

差別は絶対あってはならない、諦めてはいけないという思い、

部落、部落外を問わず、思いを語り合いながら多くの仲間をつくっていくことの大切さを訴えています。

そうやってこの学習は、あらためて自身をふり返るとともに、子どもたちそれぞれが生きていく道しるべとなっていました。

アンケートに回答してくれた彼女に起こった、「その後」の人生に、  
この道しるべは生かされていました。彼女の回答の続きです。

Q. 十数年経った今、どう思っているか？

年を重ねて、大人と言われる年になって、日頃はどちらかという忘れてますが、ときおり自分が部落の人間だと思えます。

個人的な話ですが、今の兄嫁は元々私のメル友で、私をはじめに仲良くなったのですが、当時彼女が住んでいた地域がいわゆる被差別部落で、彼女は外から引っ越してきた人だったので、周りに住む人たちのことを蔑むようなことを時々言っていました。「これだから、アッチの人は…」って。それを聞いて胸が痛んだし悩みました。

でもずっと仲良くて良かったから、自分もそうだと打ち明けました。ビックリした様子でしたが、「『アッチの人』ってひとくくりみたいにしてごめん。ちゃんと一人の人として付き合う」って、分かってくれたようでした。

中学の時、全体学習等を通して学んでいなかったら、一人で我慢して隠していたのだと思います。

あと、大人になった今、親の歳になったような気分で感じることは、「私に頑張る場所を与えてくれてありがとう」ということです(´・`)

勉強も何もかもテキトーだった私が、イキイキできる場所でした(o´▽`o)

とりあえず今思いついたのはこんな感じです(^^;

役立つかどうか、的はずれかもしれないけど、少しでも恩返しできるといいな。

あのときのTの訴えがあったから、  
あのときの学習があったから、  
彼女は道を踏み外すことはなかったのかもしれない。  
あるべき道を当たり前、堂々と生きてこられたのかもしれない。  
そんな思いになります。

たった1本の電話、そして、誰もが認められる場所——。  
そんなつながりが、誰にとっても必要なのではないのでしょうか。  
セーフティーネットが必要なのは、「いま、ここ」です。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」



うずしおランチ代表